

すな た うば ぬま い せき
砂田姥沼遺跡
(F区)

平成25年7月

宇都宮市教育委員会

序

宇都宮市の南東部に位置する東谷・中島地区付近は、近年までのどかな田園風景が広がっていましたが、大規模な区画整理事業等に伴い、著しい変貌を見せております。また、開発に伴い発掘調査が数多く実施され、杉村遺跡、権現山遺跡、磯岡北遺跡などの古代集落や東山道といった貴重な遺跡が複合して存在していることが明らかになってきた地域でもあります。

今回、スズキ株式会社の店舗建設に伴い影響を受けることとなった本遺跡の取り扱いにつきましては、関係機関との協議の上、本市教育委員会が調査主体となり、スズキ株式会社が費用を負担し、現地における調査と調査報告書の作成については株式会社日本窯業史研究所が担当して、店舗建設により影響を受ける部分について、記録保存のための発掘調査を実施いたしました。

その成果をまとめたものが本報告書であります。多くの方々がさまざまな方面におきまして広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、埋蔵文化財に関する協議や発掘調査にあたり多大なご理解ご協力をいただきました関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成 25 年 7 月

宇都宮市教育委員会

教育長 水 越 久 夫

例 言

1. 本書は、栃木県宇都宮市インターパーク4丁目（東谷・中島土地区画整理事業地51街区6画地）に所在する「砂田絶沼遺跡（F区）」の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、スズキ株式会社による店舗建設に伴うもので、同社の依頼により宇都宮市教育委員会を調査主体者とし、調査実務は株式会社日本産業史研究所がこれにあたった。
3. 調査は、平成25年3月12日～同月27日まで野外調査を実施し、その後断続的に作業を行い同年7月31日まで整理・報告書作成作業を行った。
4. 野外調査は水野順敏が担当し、報告書作成作業も行った。遺物整理・編集作業は、鈴木智子の協力を得た。

5. 調査組織

調査主体者・宇都宮市教育委員会	調査実務者・株式会社日本産業史研究所
水越 久夫 教育長	菅岡智代 代表取締役
赤石澤 亮 文化課長	水野順敏 調査担当者（日本考古学協会々員）
富川 努 文化財保護グループ係長	
近藤 真 文化財保護グループ	

6. 調査記録及び出土遺物は宇都宮市教育委員会が保管する。本書の執筆はI-1を近藤 真、他は水野が行った。
7. 野外調査から整理・報告書作成作業において下記の方々よりご助力とご指導を賜った。ご芳名を記して謝意を表する。（敬称略、順不同）
スズキ㈱、株式会社スズキビジネス、栃木県教育委員会文化財課、㈲大藤工業、㈲瀬井設計一般建築士事務所、㈲さつき測量、㈲ダイショウ、岩崎 祥、今平利幸、篠原祐一、長嶋史弘、山下守昭
参加者
入江 晴江、小高真理子、藤原 餅子、菅野 繁、長谷川健司、鈴木 智子

凡 例

1. 本道路の略号は、UT（宇都宮）・SU（砂田絶沼）・F（F区）で、遺物の注記はこれによる。また、遺構の略号はSI（竪穴住居跡）、SB（掘立柱建物跡）、SK（土坑）、SD（溝跡）、P（小穴）、PT（住居柱穴）である。
2. 第3図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「宇都宮東部」【上三川】を部分複製し加筆した。第1、13図は栃木県埋蔵文化財調査報告第337集「砂田絶沼遺跡・砂田瀬遺跡」27頁第8図を複製加筆した。第7図SB-1は、宇都宮市埋蔵文化財調査報告第67集「砂田絶沼遺跡（D区）」、同第70集「砂田絶沼遺跡（E区）」の各報告書と今回の実測図を合成し作成した。
3. 遺構実測図の縮尺は、住居跡・土坑及び溝跡土壁図が1/60、炉跡は1/30、掘立柱建物跡・溝跡が1/80、遺物実測図は1/3を基本とする。第4図調査区全体図はE区と合成した。
4. 遺構図面上の北の方位は、照標北を示す。土層図、断面図の水準線の数値は、海拔標高を示す。全体図に示した座標値は、日本平面直角座標（第Ⅱ区）及び世界測地系（JGD2000）によるもので平成11年3月11日以降の修正は行っていない。
5. 挿入の遺物番号は本文中及び写真図版の番号と合致する。写真図版は○・□の前の挿入番号、後が遺物番号である。
6. 遺構図面で使用したスクリーントーンは以下の通りである。



炭化材



粘土・焼面・赤彩

目 次

序	
I はしがき	
1. 調査に至る経緯と経過	7
2. 調査の経過と概要	7
3. 調査の方法と基本層序	7
II 遺跡の位置と環境	
1. 地理的環境	9
2. 歴史的環境	9
III 遺構と遺物	
1. 竪穴住居跡	13
2. 掘立柱建物跡	13
3. 土坑	19
4. 溝跡	19
5. 小穴	19
6. 調査区内出土遺物	21
IV 総括	
1. 土地利用の変遷	23
2. 特色ある遺構・遺物について	23

表 目 次

第 1 表 周辺遺跡一覧表	第 4 表 SD-02 出土遺物観察表
第 2 表 SI-01 出土遺物観察表	第 5 表 調査区内出土遺物観察表
第 3 表 SB-01 出土遺物観察表	

挿 図 目 次

第 1 図 調査区の位置と周辺の遺構配置図	第 7 図 SB-01, 出土遺物
第 2 図 基本層序	第 8 図 SK-01
第 3 図 遺跡の位置と周辺遺跡	第 9 図 SD-01
第 4 図 調査区全体図 (北がF区北, 中央がE区, 南がF区南)	第 10 図 SD-02
第 5 図 SI-01 炭化物出土状況, 出土遺物 (1)	第 11 図 SD-02 出土遺物
第 6 図 SI-01, 炉跡, 出土遺物 (2)	第 12 図 調査区内出土遺物
	第 13 図 古墳時代前期の住居跡配置図

図版目次

- 図版1 A.調査区全景・調査前(南より) B.調査区全景(南より) C.南側調査区全景(北西より) D.北側調査区全景(南西より)
- 図版2 A.SI-01土層(西より) B.SI-01土層(南西より) C.SI-01炭化物出土状態(西より) D.SI-01完掘(西より) E.SI-01全景(北より) F.SI-01掘方全景(西より) G.SI-01掘方土層(南より) H.SD-02完掘(西より)
- 図版3 A.SI-01炭化物出土状態(南より) B.SI-01炭化物出土状態(南より) C.SI-01土器出土状態(東より) D.SI-01土器出土状態(南より) E.SI-01土器出土状態(北より) F.SI-01炉跡(南より) G.SI-01炉跡土層(北東より) H.SI-01炉跡掘方(西より)
- 図版4 A.SI-01貯蔵穴(南より) B.SI-01-P2土層断面(西より) C.SI-01石鏃出土状態(西より) D.SB-01(西より) E.SB-01-イ-9土層(西より) F.SK-01完掘(西より) G.SK-01土層(西より) H.SD-01北側土層(南より)
- 図版5 A.SD-02土層(西より) B.SD-02上層の炭化物(西より) C.SD-02北側土層(南より) D.SD-02底面工具痕(西より)、出土遺物(1)
- 図版6 出土遺物(2)
- 図版7 出土遺物(3)

I はしがき

1. 調査に至る経緯と経過

今回の調査地区については、平成24年11月21日付けにて、スズキ株式会社より宇都宮市教育委員会あてに文化財保護法第93条による土木工事等の届出の進捗依頼があった。

内容について宇都宮市教育委員会が検討したところ、届出に係る場所は、周知の埋蔵文化財包蔵地 砂田焼沼遺跡(栃木県遺跡番号4356)の範囲内であり、一部発掘調査が実施されていない場所であることが分かった。また、過去に実施された周辺の発掘調査結果を勘案すると、店舗建設予定地内に遺構が存在する可能性は極めて高いものと考えられた。

その結果に基づき、意見を付して栃木県教育委員会あて進捗したところ、発掘調査を実施すべきとの指示が同県教委より事業者に発せられた。

事業者と宇都宮市教育委員会が協議をした結果、同地については県教委からの指示に基づき発掘調査を実施することで合意した。

調査の実務について検討を行った結果、事業者 スズキ株式会社が発掘調査に要する費用を負担し、事業者からの調査依頼のもと、宇都宮市教育委員会が調査主体として手続き等の事務処理を行い、株式会社日本窯業史研究所が現地における発掘調査及び発掘調査報告書の作成を担当することとなった。

2. 調査の経過と概要

調査区は既に調査済のE区を挟んで2か所に分かれていた。北側は約130㎡、南側は当初未調査部分全体の約250㎡の予定であったが、現状保存が可能な駐車場部分を除く100㎡となり、合計230㎡を対象とした。

調査は3月12日より重機による表土除去、設営などに着手し、表土の除去が終了した部分より人力による遺構確認作業に入った。

北側調査区では南東部でD区のSB-01及びE区の7号掘立柱建物跡の一部と考えられる柱掘方、北西隅でII区のSD-22の延長部(SD-02)、径18～40cm、深さ10～30cmの小穴17口を確認した。南側調査区ではE区のSD-02の延長部(SD-01)、古墳時代前期の竪穴住居跡1軒(SI-01)、土坑1基(SK-01)、小穴4口を確認した。竪穴住居跡は東半部が現状保存される駐車場部分側に延びており、西半部を調査し得た。本跡は多量の炭化物と焼土が遺存し、火災住居と判断された。ほぼ完全形の坑、小形竈なども見られたが遺物の遺存量は少なかった。

SB-01は古墳時代後期以降と判断されるが、明確な時期は確認できなかった。SD-01・SK-01及び小穴の大部分は黒積土の状況から近世以降のものと判断し得るが、SD-02は明確に難しい。

出土遺物は縄文時代早期の土器・石鏝、古墳時代前～後期の土師器、奈良時代の土師器、須恵器などが出土した。

3月19日宇都宮市教育委員会による終了確認を受け、同月27日に仮設施設の撤去を終え野外調査を終了した。整理・報告書作成作業は同年6月1日～7月31日まで実施した。

3. 調査の方法と基本層序

調査区造成工事の後長期にわたり放置されていた為、雑草が繁茂していた。先ず、草刈りを行い、重機による表土除去作業に入った。その後人力による遺構確認作業を行い、確認した遺構は、土層観察用のベルトを設定し掘り下げを行った。土層の写真撮影・実測の後ベルトを除去して完掘し、写真撮影・実測を行った。なお、

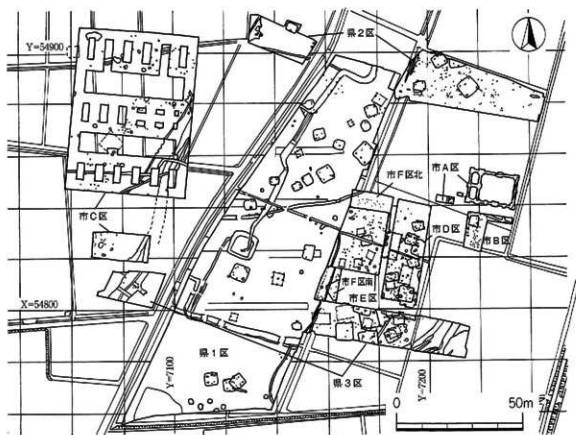
竪穴住居跡は火災住居で炭化物や焼土が多量に遺存する為、これらの検出状況の写真撮影・実測後完掘して再度写真撮影と実測を行った。さらに、全景写真撮影の後、床面下の調査を行い、この写真撮影と実測を実施した。

写真撮影は、35mm版の白黒・カラーリバーサルフィルムを基本とし、デジタルカメラで補足した。撮影には三脚及び大型脚立を使用した。

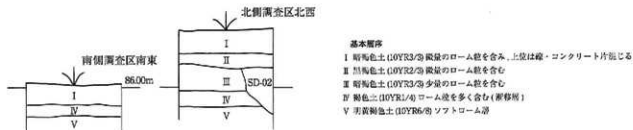
実測は手実測を基本とし、炬跡は縮尺10分の1、竪穴住居跡と土坑、土層図は縮尺20分の1、他は縮尺40分の1で作成した。

調査区の区画は、日本平面直角座標（第Ⅸ系）及び世界測地系（JGD2000）によるもので、2011年3月11日以降の修正は行っていない。

調査区は前述の如く南・北2か所に分かれており、南側では造成工事の影響で現地表面下約24cmでローム漸移層に至るが、北側は約65cm程の堆積が認められた。



第1図 調査区の位置と周辺の遺構配置図



第2図 基本層序

II 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

遺跡は、栃木県宇都宮市インターパーク4丁目3-8に所在し、市域の南端にあって南は上三川町と隣接する。関東平野の北端に位置する本県は、東・北・西の三方を山地に囲まれ、中央部から南側が平野部に開けている。この平地部は鬼怒川、那珂川等の河川の流域となっており、宇都宮市はその中央部に位置する。宇都宮市の東寄りを鬼怒川が南流し、市域の中央部にはその水系の田川が同じく南流する。これらの河川に沿って低地と田原・宝木・岡本・宝積寺の各台地が南に向かって細長く伸び、各台地は中・小河川により樹枝状に開折されている。本遺跡は標高86m程の田原台地に立地しており、台地と小支谷が複雑に入組んでいる。

かつては水田や畑地が広がり、広葉樹の平地林が点在する田園地帯であったが、前述の如く現在は大規模な土地区画整理事業が実施され、大型商業施設や各種の工場、住宅などの建設が進んでおり、その景観は急激に様変わりした。

交通的には、JR宇都宮駅の南方約7kmに位置し、東方約0.5kmを新4号国道が南北に延び、北東約0.7kmでこれに宇都宮環状線（国道121号線）が交差し、南方約1.1kmには北関東自動車道の上三川宇都宮インターが設けられるなど交通の要衝である。

2. 歴史的環境

本遺跡の所在する宇都宮市南部から上三川町北部にあたるこの地域は遺跡の密集する地域として知られている。ことに近年の道路網の整備や区画整理事業に伴い大規模な発掘調査が重ねられ、その実態が鮮明になってきた。

今次調査区を含む、東谷・中島土地区画整理事業地内においても、県埋文センターによる長年の調査によって、約137haの地区内に10か所の遺跡と2か所の古墳群が調査されている。周辺の主な遺跡を第2図、第1表に示した。

尚、この砂田総沼遺跡においては推定面積約16,400㎡のうち既に県埋文センターにより1～3区（約8,600㎡）、市教委によりA～E区（約2,650㎡）の計8区（約11,250㎡）の発掘調査が実施されている。これらの調査成果はすべて公開されており、それらを概観すると次の如くである。

県埋文センター調査の1～3区

古墳時代＝竪穴住居跡27軒、方形区画溝1基、掘立柱建物跡6棟、橋列1条

古墳末～奈良時代＝旧河道2ヶ所、通路状遺構5基

奈良・平安時代＝竪穴住居跡3軒

市教委調査のA～E区

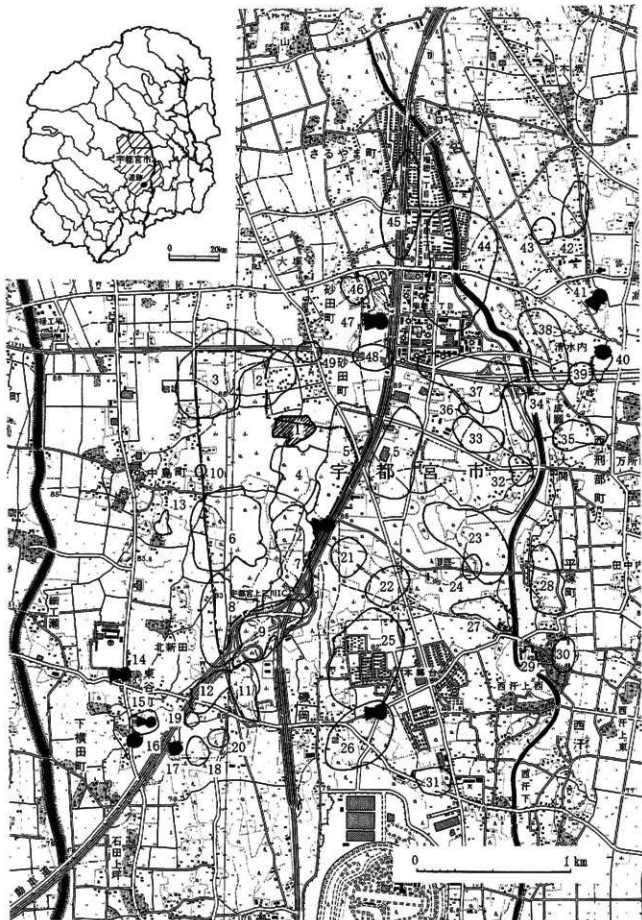
古墳時代＝竪穴住居跡17軒、掘立柱建物跡11棟、土坑18基、小穴85基、旧河道1ヶ所

奈良・平安時代＝土坑3基

中近世・時期不明＝井戸跡1基、土坑6基、溝跡7条、小穴152基であった。

今次調査区で確認された住居跡SI-01と同じ古墳時代前期の住居跡は、県埋文センター2区のSI-01、3区のSI-05の2軒で、時期的には両者の中間に位置すると考えられる。

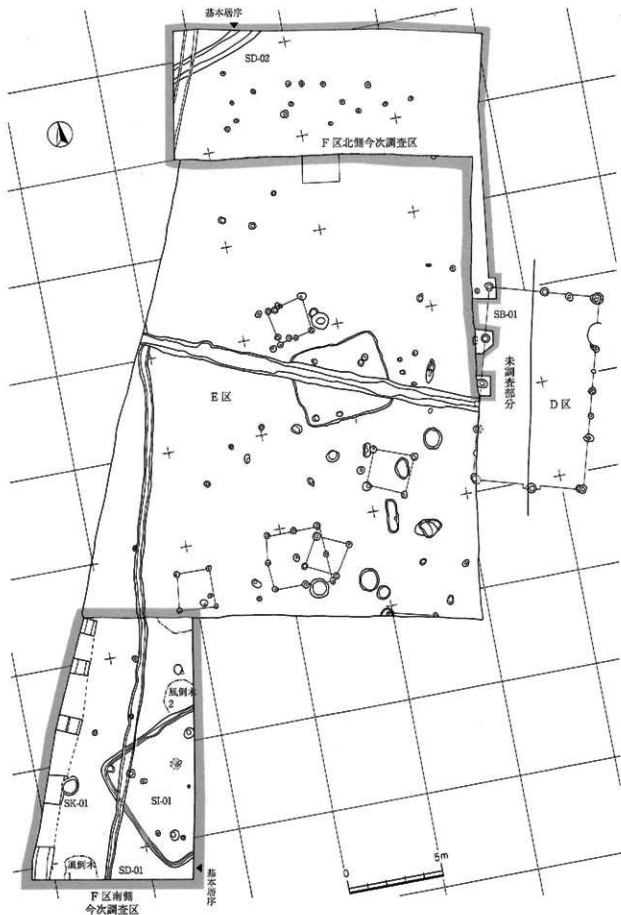
尚、他の遺跡を見ると北東の砂田東遺跡で2軒、南東の西刑部西原遺跡で3軒の計5軒が調査されている。



第3図 遺跡の位置と周辺遺跡

第1表 周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	種別	時期
1	砂田窪沼遺跡	集落跡	古墳中期～平安時代
2	砂田窪遺跡	遺物散布地	古墳・奈良時代
3	砂田遺跡	集落跡など	縄文早期、古墳中・後期・奈良・平安時代の集落、近世の墓域、時期不明の道路状遺構
4	中島窪遺跡	集落跡・古墳	古墳～平安の集落、古墳時代
5	西刑部西原遺跡	集落跡	縄文の遺物散布地、古墳・後期～平安時代
6	立野遺跡	集落跡	旧石器時代、縄文早～後期・弥生・古墳中・後期、奈良末平安時代初・中近世
7	杉村遺跡	遺物散布地	縄文～古墳(中期中心)
8	梅現山遺跡	集落跡	弥生・古墳中期～奈良時代
9	杉村遺跡	集落跡	縄文～平安時代
10	赤沢高塚群遺跡	高塚	江戸時代(供養塚?)
11	杉村遺跡	No.7と同じ	No.7と同じ
12	原遺跡	集落跡	古墳時代中期～後期
13	半内遺跡	集落跡	奈良時代
14	双子塚古墳	古墳	前方後円墳
15	笹塚古墳	古墳	前方後円墳(中期5C第3四半期かやや古い)
16	鷺舞塚古墳	古墳	円墳(笹塚より新しいと推定)
17	松の塚古墳	古墳	円墳(6C初頭)
		集落跡	古墳時代中期後半～後期初頭
18	梅現塚遺跡	古墳	円墳2基・不明墳1基
19	原古墳群	古墳	円墳8基
20	草塚古墳群	古墳	円墳5基
21	西沼遺跡	集落跡	奈良・平安時代
22	内野遺跡	集落跡	古墳～平安時代
23	古原塚高塚群	高塚	江戸時代
24	不鳥堂遺跡	集落跡	奈良・平安時代
		遺物散布地	旧石器時代・縄文時代
25	西赤堀遺跡	古墳	古墳後～終末期6C後半円墳2基・7C初前方後円墳2基
		墓域	古墳後～終末期方形周溝遺構11基
		集落跡	奈良・平安時代(8C後半～9C初)
26	磯岡・西刑部の古墳群	古墳	古墳5基(後期)
	飯塚前愛宕塚古墳	古墳	前方後円墳(後期)
27	下小原遺跡	集落跡	奈良・平安時代
28	平塚原旗岸遺跡	集落跡	古墳～平安時代
29	高島船跡	船跡	中世(高島右京守築城)
30	南前遺跡	集落跡	縄文・奈良時代
31	西赤堀東遺跡	集落跡	古墳～平安時代
32	後舟塚遺跡	集落跡	奈良・平安時代
33	中道遺跡	集落跡	奈良・平安時代
34	小原原遺跡	集落跡	奈良・平安時代
35	板戸遺跡	集落跡	奈良・平安時代
36	大岡高塚群	高塚	江戸時代高塚2基
37	大岡台遺跡	集落跡	奈良・平安時代
38	轟腰遺跡	集落跡	古墳～平安時代
39	成願寺遺跡	集落跡	古墳時代中・後期
		古墳	後期(7C)
40	成願寺北遺跡	集落跡・古墳	奈良・平安時代、飯塚山古墳を含む
41	飯塚古墳	古墳	前方後円墳(後期)
42	根木西台古墳群	古墳	前方後円墳3基、方墳1基、円墳15基、不明2基調査、30～40基?
43	桑島台古墳群	古墳	円墳2基調査、10基以上?
44	瑞穂野田池遺跡	集落跡	旧石器～平安時代
		古墳	円墳2基
45	猿山遺跡	集落跡	奈良・平安時代
		古墳	古墳時代後期円墳2基、塚輪棺2基
46	下桑島西原古墳群	墓域	方形周溝遺構1基
		古墳	前方後円墳
47	南原古墳	古墳	前方後円墳
48	上横田A遺跡	集落跡	古墳後期・平安時代(9C)
49	砂田東遺跡	集落跡	古墳・奈良時代



第4図 調査区全体図(北がF区北、中央がE区、南がF区南)

Ⅲ 遺構と遺物

今次調査区では、古墳時代前期末葉の竪穴住居跡1軒（SI-01）と古代の掘立柱建物跡（SB-01）、時期不明の溝跡2条（SD-01・02）、土坑1基（SK-01）、小穴（P-01～23）など調査した。遺物は縄文時代の土器、石鏃、古墳時代前～後期の土師器、奈良時代の土師器・須恵器などが出土した。

1. 竪穴住居跡

SK-01

遺構（第5・6図、図版2・3）

南側調査区の東端に位置し、東半部は調査区外に所在する。SD-01と重複しこれに切られていた。

平面は、北西・南東長6.6m、現存南西・北東長6m、本来は6.6×6.6mの隅丸方形と推定され、炉跡を通る主軸はN-24°20'・Wを示す。

壁は現存高20～30cmでほぼ直立する。壁溝は幅15～25cm、深さ8～13cmで、現存部分全体に認められ、本来は壁下を圍繞すると考えられる。

床面は主柱穴より内側は平坦で堅く締っていたが、外側はこれより僅かに高くやや軟弱であった。また、これらの部分は竪穴の掘削に際して一旦掘り下げてローム粒・塊と黒色土で埋戻していた。

小穴は計7口確認し、PT-1～3が主柱穴、PT-4は所謂貯蔵穴と判断される。主柱穴の3本は径40～60cm、深さ53～74.6cmで、柱を立てた後周囲を貼床していた。その痕跡から柱は径18～22cmのものを使用していたと推察される。

PT-4は竪穴の北西隅に設けられ、径40×60の楕円形で深さ22cm、貯蔵穴と考えられる。内部より同一個体と見られる土師器壺の胴部下半～底部の破片が20片程出土したが下半しか復原出来なかった。

炉は竪穴の北西寄りに設けられ、さらにPT-1とPT-2の中間よりやや北東に寄る。径約50cmの地床炉で南東側に長さ40、径15～20cmの細長い河原石が枕石として据えてあったが、火熱によって中央で割れていた。火床面は中央が僅かに凹むが焼土の遺存は少なく、火熱によって6cm程の厚さで赤化していた。

本跡は、床面上5～30cmの位置で炭化材や焼土の遺存が認められ火災住居跡と判断される。これらは第5図に示した如く、壁際に多く遺存し中央部は少ない。また、炭化材は外から内側に向けて下降する状態で遺存した。炭化材の多くは広葉樹、おそらくはナラ・クヌギの類と見られるが一部に篠竹と思われるものも認められた。調査当初は火災住居の割に出土遺物が少ないことから、住居廃絶後の火災かと推測したが、小形壺や埴のほぼ完形品が焼土及び炭化物下より出土しており、居住中の火災と判断した。

出土遺物（第5・6図、図版5・6）

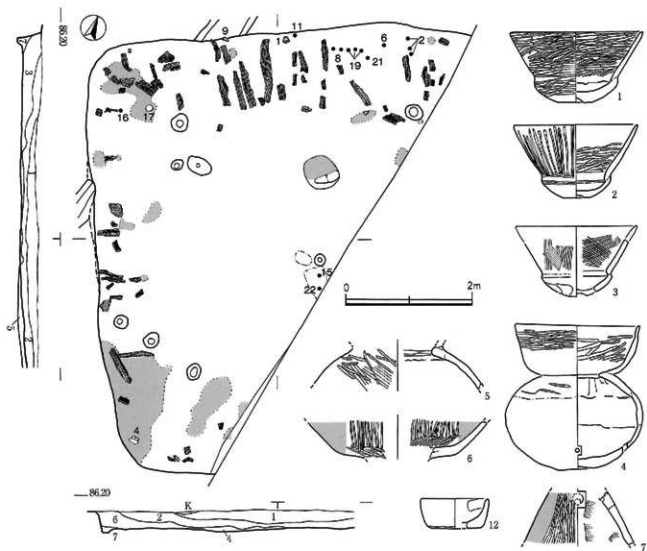
遺物は土師器の小形壺、埴、高坏、塊、手づくね土器、器台、甗、甕などが出土した。器台はいずれも破片ながら受部に透し孔を穿った、特殊器台が4個体分出土している。

2. 掘立柱建物跡

SB-01

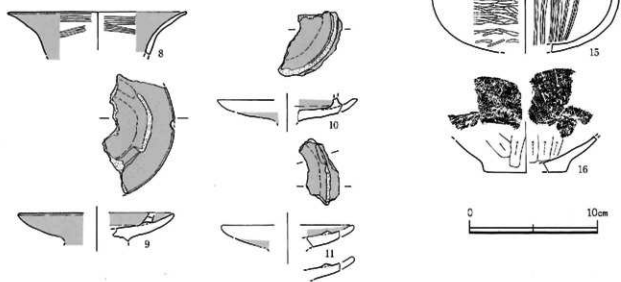
遺構（第7図、図版4）

北側調査区の南東端に位置し、大部分は東側の調査区外に所在しており3口の柱掘方を確認したのみである。なお、図に示した如く東半部はD区、西辺の南半はE区の調査に際して調査されており、3次の調査によってほぼ全体が確認された。

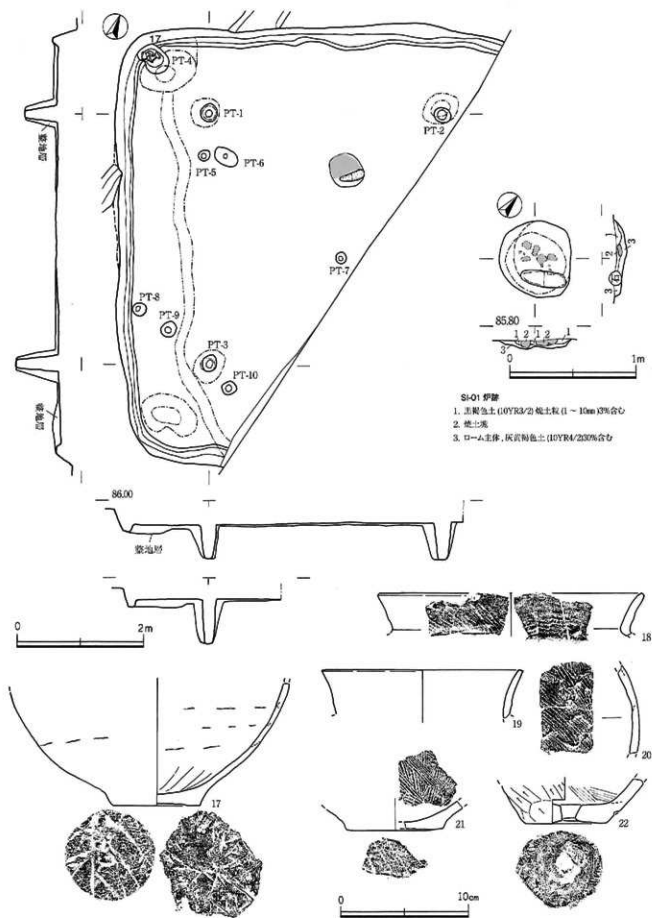


SI-01

1. 黒褐色土 (10YR3/2) ロ-A 取 (1 ~ 3cm 15%, 下部に灰白色 (10YR7/1) 混入土混・焼 (1 ~ 30cm 15%) 含む
2. 黒褐色土 (10YR3/2) ロ-A 取 (1 ~ 10cm 10%, 炭化物混 (1 ~ 3cm) 混入含む
3. 黒褐色土 (10YR2/2) ロ-A 取 (1 ~ 10cm 10%, 炭化物混・灰 (1 ~ 30cm 13%, 焼土混・焼 (1 ~ 30cm 11%) 含む
4. 灰褐色土 (10YR4/2) ロ-A 取・焼 (1 ~ 50cm 10%) 含む
5. 黒褐色土 (10YR2/2) 灰褐色土 (10YR5/2) 混・焼 (1 ~ 30cm 10%), ロ-A 取・焼 (1 ~ 40cm 15%) 含む
6. 黒褐色土 (10YR2/2) ロ-A 取 (1 ~ 10cm 15%, 炭化物混 (1 ~ 5cm 12%, 焼土混・焼 (1 ~ 25cm 11%) 含む
7. 黒褐色土 (10YR2/2) ロ-A 取・焼 (1 ~ 40cm 10%, 炭化物混 (1 ~ 10cm 13%, 焼土混 (1 ~ 10cm 13%) 含む



第5図 SI-01 炭化物出土状況、出土遺物 (1)



第6図 SI-01, 炉跡, 出土遺物 (2)

第2表 SI-01 出土遺物観察表

() 推定値 [] 現存値

No.	種別		大きさ (cm)	遺存度	整形・手法等	胎土・焼成・色調	出土位置・備考
	器種	口径 高さ 底径					
SI-01 1	土師器 埴	口径 10.4 器高 5.5 底径 2.6	98%	紐づくり、内外面とも全体に横(一部斜め)のヘラミガキ、底部外の中央凹む	胎土 良好 内外 にぶい黄褐色・黒褐色・一部黒色	粗砂粒混 焼成 色調	No.2, 北壁際
SI-01 2	土師器 埴	口径 (9.6) 器高 5.7 底径 2.1	60%	紐づくり、口辺部外面は縦のヘラミガキカ? 口辺上位は内外面横ナデ、二次火熱により器面やや荒れるが、内面と外面の体底部は横のヘラミガキ、底部外面の中央凹む	胎土 焼成 色調	粗砂粒混和 良好 二次火熱で変色、明赤褐色・黒褐色・にぶい黄褐色	No.21~23, 北東部、本来は赤彩カ?
SI-01 3	土師器 埴	口径 — 器高 — 底径 —	口辺~体 部断片	紐づくり、口辺部外面縦(一部斜め)のハケ目(10本?)、口辺部内面積(一部斜め)のハケ目、体・底部内外面ともヘラミガキ	胎土 焼成 色調	粗砂粒混和 ややあまい 褐灰色	横積土(北西)
SI-01 4	土師器 小形甕	口径 9.7 器高 10.9~ 11.5 底径 3.5	95%	紐づくり、内外全体と口辺部内面積(一部斜め)ヘラミガキ、体・底部内面積のヘラナデ、粘土肥接合痕目立つ、体部下端に径4mmの小孔を穿つ	胎土 良好 焼成 色調	粗砂粒混和 良好 黒褐色・黒色・にぶい黄褐色	南西隅No.1
SI-01 5	小形甕	口径 — 器高 — 底径 —	肩部断片	紐づくり、体部外面粗いハケ目後ヘラミガキ、内面積ナデ、二次火熱により器面荒れる。粘土肥接合痕目立つ	胎土 焼成 色調	粗砂粒混和・明赤褐色粒目立つ ややあまい? 内外にぶい黄褐色	横積土(北東)
SI-01 6	土師器 高坏カ	口径 — 器高 — 底径 —	坏部断片	紐づくり、内外面積のヘラミガキ	胎土 焼成 色調	粗砂粒混和・黒色粒目立つ 良好 内 褐灰色・にぶい黄褐色 外 黒褐色・褐灰色	No.17, 北壁際、床面、赤彩が二次火熱で劣化カ、7と同一個体カ
SI-01 7	土師器 高坏	口径 — 器高 — 底径 —	脚部断片	紐づくり、内面積にヘラナデ、外縦のヘラミガキ、径8mm以上の円形の透孔を穿つ	胎土 焼成 色調	粗砂粒混和・黒色粒目立つ 良好 黄褐色・明赤褐色	横積土(南西)、赤彩が二次火熱で劣化カ、6と同一個体カ
SI-01 8	土師器 器台	口径 (13.8) 器高 (3.4) 底径 —	受部断片	紐づくり、内外面積ナデ後ヘラミガキカ	胎土 焼成 色調	砂粒混和 ややあまい にぶい黄褐色	No.11, 北壁際、床面、内外面赤彩、10と同一個体カ、遺存部に透孔が見られず、鈎付高坏の可能性もあり
SI-01 9	土師器 器台	口径 — 器高 — 底径 —	受部断片	紐づくり、内外面ヘラミガキ、受部底面近くに幅1.6~1.9cmの透孔の痕跡あり	胎土 焼成 色調	粗砂粒混和・白色粒目立つ 良好 灰黄褐色	No.2, 北壁際、赤彩の痕跡
SI-01 10	土師器 器台	口径 — 器高 — 底径 —	受部断片	紐づくり、内面ヘラミガキ、外面は器面荒れ不詳	胎土 焼成 色調	砂粒混和 ややあまい にぶい黄褐色	横積土(北西)、内外面赤彩、8と同一個体カ、遺存部に透孔が見られず、鈎付高坏の可能性もある
SI-01 11	土師器 器台	口径 — 器高 — 底径 —	受部断片	内外面ヘラミガキ、受部底面近くに幅1.7cm以上の透孔の痕跡あり	胎土 焼成 色調	砂粒混和 良好 黒色・黒褐色	No.2, 北壁際、赤彩カ
SI-01 12	土師器 手づくね土器	口径 (6.2) 器高 [2.35] 底径 (4.4)	体・底部 断片	手づくね、内面と口辺部外面ナデ仕上げ、底部外面ヘラナデ、体部下半に成形時の胎土のひび割れ目立つ	胎土 焼成 色調	砂粒少量混和 良好 内 黒褐色 外 橙褐色・黄褐色	横積土(上位)、埋没途中の流入カ
SI-01 13	土師器 手づくね土器	口径 (7.8) 器高 (3.2) 底径 (5.3)	体・底部 断片	手づくね、内面と体部外面横ナデ仕上げ、底部外面ヘラナデカ	胎土 焼成 色調	砂粒混和・白色粒目立つ 良好 内 灰黄褐色 外 にぶい黄褐色・灰黄褐色・黒色	PT-4 横積土
SI-01 14	土師器 手づくね土器 カ	口径 — 器高 — 底径 3.0	底部片	手づくねカ、内外面粗いヘラナデ	胎土 焼成 色調	砂粒混和・白色粒・赤褐色粒目立つ 良好 内 黒褐色 外 暗褐色	横積土(南西)

No	種別	大きさ (cm) 口径 高さ 底径	遺存度	整形・手法等	胎土・焼成・色調	出土位置・備考
	器種					
SI-02 15	土師器 埴	口径 (14.1) 器高 [6.4] 底径 —	40% (2 片)	紐づくり、体・底部外面横のヘラミガキ、内面横のヘラミガキ	胎土 焼成 色調 良好 内 明赤褐色 外 明赤褐色・黒褐色	No 25 + 埋積土 (南 西)、埋没途中に流 入カ、古墳中期
SI-01 16	土師器 麦カ (転用鉢)	口径 — 器高 [2.8] 底径 (6.4)	体・底部 断片	紐づくり、内面横のヘラナデ、 体部外粗いヘラナデ、底部外面 木炭灰	胎土 焼成 色調 良好 内 明赤褐色・黒褐色 外 橙褐色	No 4、北西隅、床面 破損後、割れ口を 擦って鉢に転用カ
SI-01 17	土師器 类 (転用鉢)	口径 — 器高 [9.3] 底径 6.9	下半部の 70%	紐づくり、体部外面ヘラ削り後 ナデ仕上げ、底部外面に木炭灰、 内面横・斜めのヘラナデ	胎土 焼成 色調 良好 内 黒褐色・赤褐色・橙色 外 橙褐色・黒褐色	PT-4、No 5、No 26、破損後、割れ 口を擦って鉢に転 用カ
SI-01 18	土師器 类	口径 (20.5) 器高 — 底径 —	口辺部断 片	紐づくり、口辺部外面の下半に 斜めの粗いハケ目、内面下半は 横の粗いハケ目、後内外面横ナ デ仕上げ	胎土 焼成 色調 粗砂粒多量混和 良好 内 黒色・にぶい黄褐色 外 暗褐色・にぶい黄褐色	埋積土 (南西)
SI-01 19	土師器 甕 or 甕	口径 (15.2) 器高 — 底径 —	口辺部断 片	紐づくり、口辺部内外面横ナデ 仕上げ、口縁に平坦面をもつ	胎土 焼成 色調 粗砂粒混和 良好 内 にぶい黄褐色・明赤褐 色 外 橙褐色	No 12・13・15、北 壁際、床面、二次 火熱で変色カ?
SI-01 20	土師器 类	口径 — 器高 — 底径 —	体部断片	紐づくり、外面斜めのハケ目、 内面横のヘラナデ、外面粘土紐 接合痕目立つ	胎土 焼成 色調 粗砂粒多量混和・黒色粒目 立つ 良好 内 にぶい黄褐色 外 にぶい黄褐色・黒褐色	埋積土 (南西)
SI-01 21	土師器 类	口径 — 器高 — 底径 (7.6)	体・底部 断片	紐づくり、体部外面横のヘラナ デ、底部外面木炭灰、内面一單 位 6本のハケ目	胎土 焼成 色調 粗砂粒多量混和・白色粒 目立つ 良好 内 褐色・黒褐色・赤褐色 外 にぶい褐色	No 16、北壁際、床 面
SI-01 22	須恵器 甕	口径 — 器高 — 底径 6.3	体・底部 断片	紐づくり、体部外面斜めのヘラ ナデ、底部外面不定方向のヘラ ナデ、内面指ナデ、底部中央に 径 10～18mmの孔を内から外に 穿つ	胎土 焼成 色調 粗砂粒混和・黒色・白色 粒目立つ・白色粘土含む 良好 内 橙褐色 外 明赤褐色・黒褐色	No 25、埋積土 (東 端)、埋没途中に流 入カ、古墳中期カ

東西 2 間 (7.84 m)、南北 4 間 (10.25 m) の南北棟で側柱式である。桁行方位は N-14°-E を示す。多くの柱掘方に掘り直しが認められ、同位置での建て替えが行われたと判断される。柱間は、桁行が東辺北より 2.7 m (9 尺) + 2.3 m (7.7 尺) + 2.46 m (8.2 尺)、梁間は北辺西より 2.7 m (9 尺) の等間隔であった。

柱掘方は径 40～60cm、深さ 40～80cm である。

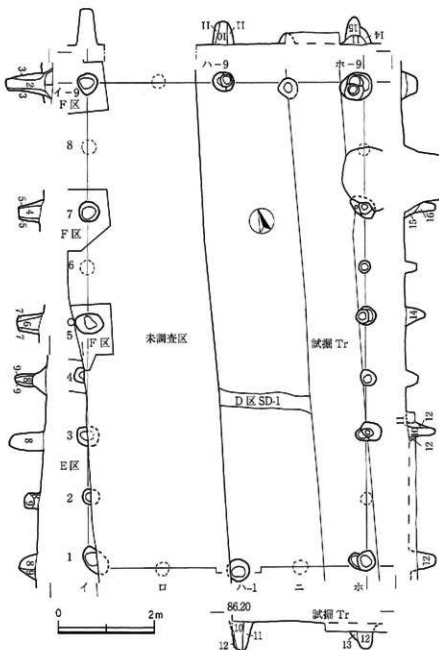
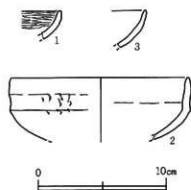
尚、本跡はこれまでそれぞれの調査区毎に報告されていたが、今回第 7 図を作成の為に D～F 区の 3 次にわたる図を合成した。その結果、前述の如くイ・1・3・5・7・9、ハ・1・9、ホ・1・3・5・7・9 の 12 本の柱による 2×4 間の建物跡を想定した。しかし、イ・2・4、ニ・9、ホ・4・6 など上記の柱穴の間にやや小振り (径 25～40cm、深さ 25～65cm) の柱穴の存在が認められた。東半部の調査では別の建物の存在を考えたが、南西部にも同様に認められる。未調査部分や試掘 Tr、他の遺構との重複を考慮するとこの建物全体に存在したものと推察される。したがって、柱間が一般的な側柱式建物に比べ半分程となっており、壁もしくは床の構造が一般的なものと異なる特殊なものであった可能性が高い。

出土遺物 (第 7 図、図版 7)

柱掘方 (イ・5・7・9) の埋積土中より古墳時代後期の土師器坏、甕の破片などが出土した。本跡の時期を明確にし得るものではないが、これ以降の施設と考えられる。

SB-01

1. 黒褐色土(10YR3/2)ローム殻(1~5mm)5%、焼土粒(1~5mm)3%含む
2. 黒褐色土(10YR3/2)ローム殻(1~10mm)15%含む、高埴を含む
3. 黒褐色土(10YR2/2)ローム殻・焼(1~30mm)30%含む
4. 黒褐色土(10YR3/1)ローム殻(1~10mm)10%含む、高埴を含む
5. 黒褐色土(10YR3/2)ローム殻・焼(1~30mm)25%含む
6. 黒褐色土(10YR3/1)ローム殻(1~10mm)10%含む、高埴を含む
7. 黒褐色土(10YR2/2)ローム殻・焼(1~30mm)30%含む
8. 黒褐色土(10YR2/2)角切のローム殻を含む
9. 黒褐色土(10YR2/2)少量のローム殻を含む
10. 黒褐色土(10YR2/2)ローム殻・焼(1~20mm)15%含む
11. 黒色土(10YR2/1)ローム殻(1~7mm)3%含む
12. 黒褐色土(10YR2/2)ローム殻(1~7mm)3%含む
13. ぶい黄褐色土(10YR7/4)黒褐色土(10YR2/2)20%含む
14. 黒色土(10YR2/1)黒褐色土(10YR3/2)20%、ローム殻(1~3mm)3%、焼土粒(1~3mm)1%含む
15. 黒褐色土(10YR2/2)ローム殻・焼(1~20mm)15%含む
16. 黒褐色土(10YR3/2)ローム殻(1~6mm)7%、赤色スロリア(1~3mm)微量含む



第7図 SB-01, 出土遺物

第3表 SB-01 出土遺物観察表

() 推定値 [] 現存値

No	種別 器種	大きさ (cm) 口径 高さ 底径	遺存度	整形・手法等	胎土・焼成・色調	出土位置・備考
SB-01 1	土師器 坏	口径 — 器高 — 底径 —	口辺部断片	紐づくり、内面と口辺部外面 ナデ仕上げ後ウルシ処理、体部 外面ヘラナデ	胎土 焼成 色調 細砂粒混和 良好 内 橙色 外 にぶい黄橙色	イ-9 埋積土
SB-01 2	土師器 坏	口径 (13.7) 器高 [4.8] 底径 —	口辺・底 部断片	紐づくり、内面と口辺部外面 ナデ仕上げ後ウルシ処理、底部 外面器面荒れ不評	胎土 焼成 色調 細砂粒混和・黒色粒目立つ ややあまい 浅黄橙色	イ-7 埋積土
SB-01 3	土師器 坏	口径 — 器高 — 底径 —	口辺部断片	内面ヘラミガキ、外面ヘラ削り 後粗いミガキ	胎土 焼成 色調 細砂粒混和・黒色粒目立つ 良好 明赤褐色	イ-5 埋積土

3. 土坑

SK-01

遺構（第8図，図版4）

南側調査区の南西部に位置し、SD-01の西約2mに隣接する。

平面は遺存状態不良で明確にし難いが、南北長86cm、推定東西長84cmの円形。深さ18cmで壁はほぼ直立し、底面は平坦であった。

埋積土は単層で、自然埋没と考えられる。遺物の出土は無かったが、埋積土の状態から近世以降の遺構と考えられる。

4. 溝跡

SD-01

遺構（第9図，図版4）

南側調査区の中央部を南北に延び、E区と合わせ計29m確認された。幅40～60cm、深さ7～12cm、底面はほぼ平坦で壁はやや外傾する。

埋積土は単層で、遺物の出土は無かった。所々に土留用の細い木杭が遺存しており、近代以降の水田の水路と考えられる。

SD-02

遺構（第10図，図版5）

北側調査区の北西隅に位置し北東・南西とも地区外に延びる。西側はⅢ区のSD-22に連なると推定される。調査区内で5.4m、Ⅲ区で54m合計59.4m調査された。尚、溝底は標高85.50m程でほぼ水平であった。また、他の溝はいずれも直線的に延びるが本跡は比較的緩やかであるが、蛇行しながら延びているのが特徴である。

調査区内では上幅0.85～1.1m、底幅0.35～0.5m、深さ40～47cmで、壁は僅かに外傾する。

埋積土の上面で炭化物粒が径15cm程の範囲にまとまって認められた。

埋積土は8～9層に大別され、灰白色の砂粒や粘土を含む層の存在が特徴的で、掘り直しがあったと考えられる。

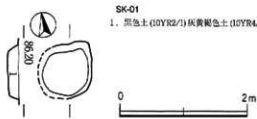
出土遺物（第11図，図版7）

埋積土中より、古墳時代後期～奈良時代の土師器、須恵器が出土した。Ⅲ区の調査でも古墳時代中期～古代にわたる土師器・須恵器が出土したものの、遺構の時期は明確にし難い。

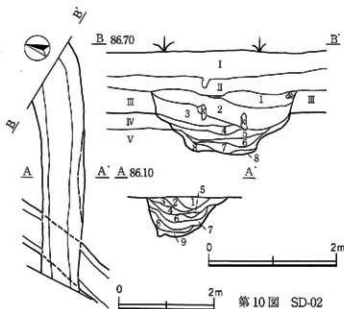
5. 小穴

今次調査では、北側調査区で20口、南側調査区で4口、総数24口確認した。北側調査区東寄りの3口はSB-01の柱掘方（イ-5・7・9）、他17口は径20～40cm、深さ12～46cm、埋積土は黒色土を主体としたものである。遺物の出土は無かったが、埋積土の状態から近世以降の耕作等に伴うものと推察された。

南側調査区の4口は径22～50cmで、深さは15～25cmを主体とするが、このうちP-1は径50cm、深さ1.2m以上で底面に至らず横方向に延びるものであった。他の3口は柱穴の可能性をもつが、このP-1は動物の巣穴かと推察される。埋積土はローム粒混じりの黒褐色土で、遺物の出土は無かった。



第8図 SK-01



第10図 SD-02

SD-01(共通)

1. 暗褐色土 (01YR4/2) 灰質褐色土 (01Y6/2) 砂・泥 (1 ~ 30mm) 30%、ローム殻 (1 ~ 3mm) 5%、赤褐色泥 (1 ~ 2mm) 微量含む。硬り、粘性あり
2. 黒褐色土 (01YR3/1) ローム殻・泥 (1 ~ 20mm) 30%、灰黄褐色土 (10YR4/2) 砂・泥 (1 ~ 30mm) 20% 含む (P-04 通土)

SD-02

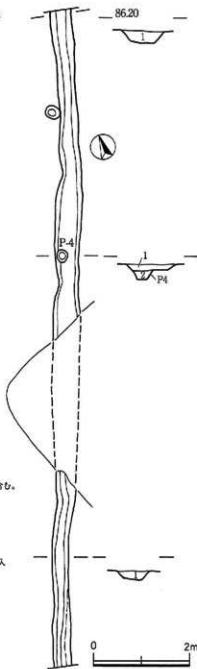
A-A'

1. オリーブ褐色 (2.5Y4/2) シルト、黒色土 (10YR2/1) 泥 (5 ~ 10mm) 10%、灰色 (7.5Y1/1) 砂質土。5 ~ 10mm の炭灰に混入
2. 灰白色 (7.5Y7/1) オリーブ灰色の砂主層、オリーブ褐色シルト 15% 含む
3. 灰色 (5Y5/1) シルト、褐色土 (10YR2/1) 砂・泥 (1 ~ 30mm) 30% 含む
4. 灰色 (5Y5/1) 砂質土、褐色土 (10YR3/4) 20%、黒褐色土 (10YR4/1) 15% 含む
5. 灰色 (5Y5/1) シルト、黒褐色土 (10YR3/1) 20%、褐色土 (10YR4/4) 10% 含む
6. 黒褐色土 (01YR3/1) 灰色砂質土 (5Y5/1) 8%、灰オリーブ (5Y6/2) シルト 5%、褐色土 (10YR4/4) 3% 含む
7. 灰褐色 (2.5Y4/1) 砂質土、黒褐色土 (10YR3/2) 30%、灰色 (5Y4/1) 泥土 10% 含む
8. 黒色土 (10YR3/1) ローム殻・泥 (1 ~ 30mm) 30% 含む
9. ローム殻・泥主層 (1 ~ 50mm)、黒色土 (10YR2/1) 20% 含む

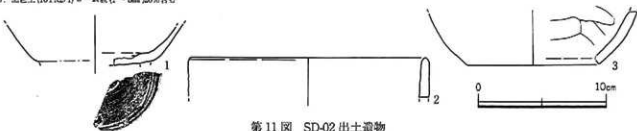
SD-02

B-B'

1. 黒褐色土 (10YR3/2) 灰オリーブ (5Y5/2) シルト 10% 含む
2. 黒褐色土 (10YR3/2) 灰オリーブ (5Y5/2) シルト 45%、炭化物殻 (2 ~ 5mm) 22%、泥土殻 (1 ~ 3mm) 微量含む
3. 黒褐色土 (10YR3/2) 灰オリーブ (5Y5/2) シルト 15%、灰白色 (7.5Y7/1) 褐色 (01YR6/4) 砂質土 3% 含む
4. 灰色 (5Y5/1) 粘土、灰白色 (5Y7/1) 粘土 5%、黒褐色土 (10YR3/2) 15%、灰白色 (5Y7/1) 褐色 (01YR4/4) 砂質土 10% 含む
5. 黒褐色土 (10YR2/1) 灰色 (5Y5/1) 粘土 10%、灰オリーブ (5Y5/2) シルト 10%、ローム殻 (1 ~ 3mm) 1% 含む
6. 灰オリーブ (5Y5/2) シルト、黒褐色土 (10YR3/1) 15%、ローム殻 (1 ~ 5mm) 3% 含む
7. 褐色土 (10YR4/1) 灰白色 (5Y5/1) 砂 (1 ~ 10mm) 5%、褐色土 (10YR4/4) 1%、ローム殻 (1 ~ 3mm) 1% 含む
8. 褐色土 (10YR2/1) ローム殻 (1 ~ 5mm) 30% 含む



第9図 SD-01



第11図 SD-02 出土遺物

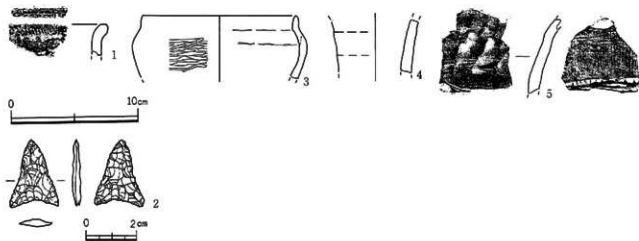
第4表 SD-02 出土遺物観察表

() 推定値 [] 現存値

No.	種別	大きさ (cm)		遺存度	整形・手法等	胎土・焼成・色調	出土位置・備考
	器種	口径	高さ/底径				
SD-02 1	須恵器 高台坏	口径 器高 底径	— — (9.5)	体・底部 断片	ロクロ成形、底部ヘラ削り後付 高台	胎土 砂粒混和 焼成 良好 色調 灰白色	瀬積土。高台の剥離後も擦って使用、体部外面にヘラ記号の痕跡。8世紀代益子産カ
SD-02 2	土師器 鉢 or 甗	口径 (18.3) 器高 底径	— — —	口辺部断片	紐づくり、内外面横ナデ仕上げ	胎土 粗砂粒混和・白色・黒色紋 目立つ 焼成 良好 色調 橙色	瀬積土。3と同一個体カ
SD-02 3	土師器 甗	口径 器高 底径 (10.2)	— — —	体部下端断片	紐づくり、内外面粗いヘラナデ、孔部・面取り1面	胎土 粗砂粒混和・白色・黒色紋 目立つ 焼成 良好 色調 内 橙色 外 橙色・黄橙色	瀬積土。2と同一個体カ

6. 調査区内出土遺物 (第12図)

遺構に伴わない状態ではあるが、縄文時代早期撚紋系土器(1)や石罫(2)、古墳時代中期の土師器甗(3)、古代の須恵壺(4)、甕(5)の口辺部なども出土している。調査区内における土地利用の変遷を知り得る資料として掲載した。

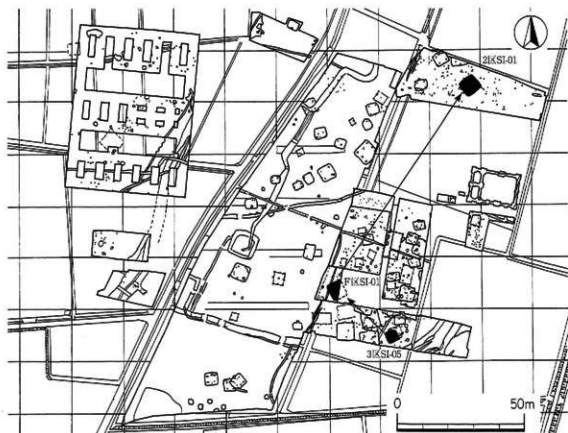


第12図 調査区内出土遺物

第5表 調査区内出土遺物観察表

() 推定値 [] 現存値

No	種別	大きさ (cm)		遺存度	整形・手法等	胎土・焼成・色調		出土位置・備考
	器種	口径	高さ/底径			胎土	焼成	
他 1	縄文土器	口径	—	口辺部断片	口縁部肥厚、肥厚部に熱紋を施す	胎土	細砂粒混和・白色粒目立つ	SI-01 埋積土、縄文早期カ
	深鉢	器高	—			底径	—	
他 2 (Ⅲ三期)	石器	長さ	2.6	100%	無柄、チャート製、重量0.9g	胎土	—	SI-01 埋積土
	石飯	幅	1.95			厚さ	0.3	
他 3	土師器	口径 (120)	—	口辺へ体部片	紐づくり、口辺部内外面横ナデ仕上げ、体部内横にヘラナデ、体部外面へラ削り後ヘラミガキ	胎土	砂粒混和・黒色粒目立つ	SD-02 東麻確盛面、古墳中期カ
	埴	器高	[4.7]			底径	—	
他 4	須恵器	口径	—	頸部断片	ロクロ整形、内外面に降灰、内面暗緑色、外面黒色に発色部分あり	胎土	砂粒を多く含む・白色粒目立つ	SI-01 埋積土(北西)
	壺	器高	—			底径	—	
他 5	須恵器	口径	—	口辺部断片	ロクロ整形、外面に平行文印目、内面指頭圧痕後横ナデ	胎土	細砂粒微量含む	SI-01 埋積土上層
	甕	器高	—			底径	—	



■古墳時代前期の住居跡

第13図 古墳時代前期の住居跡配置図

IV 総括

今次調査区は約 16,000㎡に及ぶと推定される砂田絶沼遺跡全体の 1.4%程の調査に過ぎない。したがって、遺跡について云々する状況には無いが、過去の調査成果を援用し概観する。

1. 土地利用の変遷

縄文時代 調査区内では遺構は全く認められなかったが、古墳時代の住居跡 SI-01 の埋積土中より、早期の燃糸文系土器片と石鏃が 1 点出土した。尚、他の調査区においては、草創期、早期、前期、中期の遺物が出土しているもののやはり遺構は確認されていない。後・晩期においては遺構・遺物とも認められなかった。

弥生時代 中期の遺構・遺物は確認されていない。しかし後期の土器は古墳時代前期の竪穴住居跡（3 区 SI-05）より出土している。

古墳時代 前期の住居跡は、今次調査区 SI-01 の他に前記の 3 区 SI-05、2 区 SI-01 の計 3 軒確認されている（第 13 図）。これらは同時に存在したものは無く、3 区 SI-05 が最も旧く、次に今次調査区の SI-01、最後に 2 区 SI-01 の順に造られたと考えられる。

中期の住居跡は本遺跡の周辺では、権現山遺跡をはじめ、立野遺跡、砂田遺跡、西刑部西原遺跡、杉村遺跡など多く見られる。しかし、遺跡内では調査区の東に隣接する D 区で 1 軒（SI-10）、調査区の間位置する E 区の 1 号竪穴状遺構も該期の可能性をもつ程度である。尚、今次調査区内では SI-01 の埋積土中より中期と考えられる土器片が出土し、SD-02 の東側の確認面からも該期の土器が認められ、近隣に遺構の存在を示唆する。

後期の住居跡は周辺の遺跡でも多く認められるが、本遺跡でも 40 軒以上が調査され、遺物も豊富である。また、灌漑用と見られる大溝やその大溝に降る通路状遺構が 3 ヶ所確認された。調査区内では明瞭な遺構は無いものの、SB-01、SD-02 などの埋積土中より該期の遺物が出土している。

奈良・平安時代 この時期の遺構は少なく、3 区で 9 世紀代の住居跡 2 軒、大溝とそこに降る通路状遺構がある。調査区内では SD-02 の埋積土中より奈良時代の須恵器高台が出土したのみで遺構は明確にし得なかった。

中・近世 今次調査区内では遺構・遺物とも確認されなかった。本遺跡内では B 区で土坑と溝跡、C 区も土坑と溝跡、D 区では土坑、溝跡の他井戸跡が確認されている。尚、当地は区画整理前は水田として利用されており、水路と見られる小規模な溝跡 SD-01 では土止の木杭が遺存し、区画整理が実施される直前まで利用されていた可能性が高い。

2. 特色ある遺構・遺物について

前述の如く、今次調査区では、古墳時代前期の竪穴住居跡 1 軒、古墳時代後期～末葉頃の掘立柱建物跡 1 棟の他は時期不明の溝跡 2 条、土坑 1 基、小穴 21 口程を調査したに過ぎない。

SI-01 は全体の 2 分の 1 程を調査し、他は調査区外に延びる。本跡は壁際を主体に焼土と炭化材が遺存し火災住居と判断される。調査に着手の当初は火災住居の割に遺物の遺存が少なく、住居廃絶後の火災かとも思われたが、調査の進捗に伴いほぼ完形の土器類が数点出土し、居住中の火災と判断された。尚、調査区東端の床面上 15～20cm 付近でまとまって土器器が出土した。これらは古墳時代中期の土器であり、本跡の埋没途中に他所より廃棄されたと考えられ、近隣に該期の住居等が存在したであろうことが推察し得る。

住居跡は全体を調査し得ず、規模・形状を明確にし難いが、一辺 6.6 m 程の方形と推察される。調査区内で

は南東隅を除く3本の支柱穴を確認し、本来は4本柱と判断される。柱穴は径40～60cm、深さ53～75cm程と確りしたもので、柱痕跡から径18～22cmの柱が立てられていたと考えられる。炉跡は枕石の置いた床炉で、PT-1・2を結ぶ線よりやや内側で、両者の中間より幾分東寄りに設けられていた。

床面は粗掘りの後ローム粒・塊主体の土で貼床しているが、壁際は帯状に掘り込まれていて貼床の厚さが20cm程に及ぶ。尚、床面は支柱の内側が平坦で堅く締っていたが、外側の壁際ではこれよりやや軟弱で幾分高くなっていた。

遺物は前述の如く破片類が多いものの、ほぼ完形の埴や小形壺の胴部下位に小孔を穿ったものが見られた。尚、小形壺は体部と口辺部の接合部の角度が当地で通常見られるものに比べやや鋭いように思われる。

また、受部に透かし孔を穿った所謂「特殊器台」もしくは「鐙付高坏」と見られる土師器片が計4片出土している。特殊器台については外来系の土器として他地域との関係が論じられるところであるが、本跡のものは在地性が高いものと判断される。

調査区北東端に位置し、D・E区に跨って所在するSB-01は、基本的には東西2間、南北4間の南北棟の建物と考えられるが、前述の如く、各柱穴の間にやや小振りの補助柱的な柱穴が認められた。全体を面的に調査したもので無く、建物全体に設けられていたか否かは明確に難しいが、その可能性が高い。部分的なものであれば、出入口に関連の施設と見ることも可能であろう。もし全体に設けられたとすれば、壁構造もしくは床構造に関連する施設と考えられ、一般的な側柱建物とは異なる性格の建物と推察される。

参考・引用文献

1. 今平利幸 1991 「栃木県における古墳時代前期の竖穴」『栃木県考古学会誌』第13集 栃木県考古学会
2. 栃木県教育委員会 1997 『栃木県埋蔵文化財地図』
3. 宇都宮市教育委員会 1997 『宇都宮市埋蔵文化財地図』
4. 今平利幸 2000 「下野における古墳時代前期外来系土器の波及と定着」『栃木県考古学会誌』第21集 栃木県考古学会
5. 橋本道朗他 2001 「八剣遺跡（弥生・古墳・平安時代編）」 栃木県埋蔵文化財調査報告書第254集 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
6. 土生朗治他 2007 「砂田徳沼遺跡」 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第60集 宇都宮市教育委員会
7. 小野麻人 2007 「砂田徳沼遺跡（B区）」 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第64集 宇都宮市教育委員会
8. 白崎智隆 2008 「砂田徳沼遺跡（C区）」 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第62集 宇都宮市教育委員会
9. 水野順敏他 2008 「砂田徳沼遺跡（D区）」 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第67集 宇都宮市教育委員会
10. 林 邦雄他 2008 「砂田徳沼遺跡（E区）」 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第70集 宇都宮市教育委員会
11. 藤田直也 2011 「東谷・中島地区遺跡群 11 砂田徳沼遺跡（1区・2区・3区）・砂田龍遺跡（1区・2区・3区）」 栃木県埋蔵文化財調査報告書第337集 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
12. 今平利幸 2012 「栃木県内における北陸系土器の動向」『東生』第1号 東日本古墳確立期土器検討会



B. 颍东区余寨 (中より)



D. 北凤颍东区余寨 (南内より)



A. 颍东区余寨・颍寨街 (目より)



C. 北凤颍东区余寨 (北内より)

図版 2



A SI-01 土層 (西より)



B SI-01 土層 (南西より)



C SI-01 炭化物出土状態 (西より)



D SI-01 完掘 (西より)



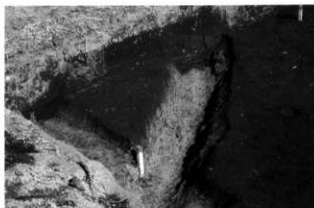
E SI-01 全景 (北より)



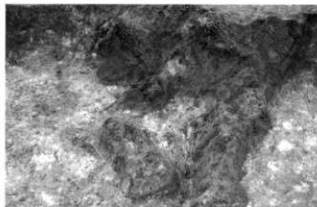
F SI-01 掘方全景 (西より)



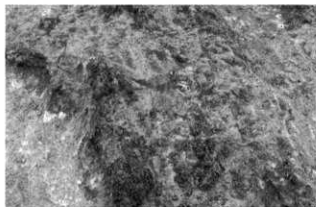
G SI-01 掘方土層 (南より)



H SD-02 完掘 (西より)



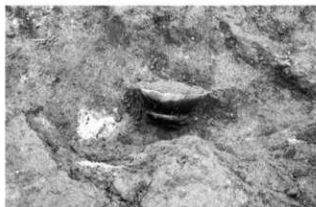
A SI-01 炭化物出土状態 (南より)



B SI-01 炭化物出土状態 (南より)



C SI-01 土層出土状態 (東より)



D SI-01 土層出土状態 (南より)



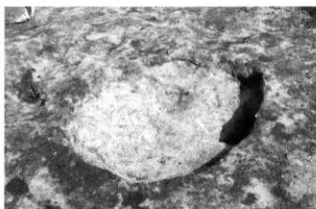
E SI-01 土層出土状態 (北より)



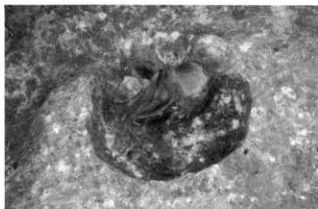
F SI-01 伊跡 (南より)



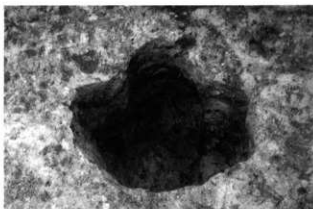
G SI-01 伊跡土層 (北東より)



H SI-01 伊跡掘方 (西より)



A SI-01 貯蔵穴 (南より)



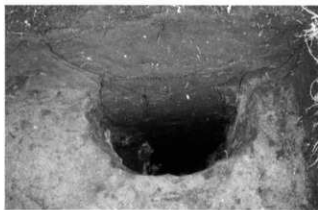
B SI-01-P2 土層断面 (西より)



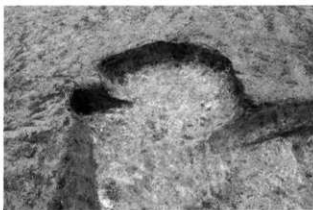
C SI-01 石露出土状態 (西より)



D SB-01 (西より)



E SB-01-イ-9土層 (西より)



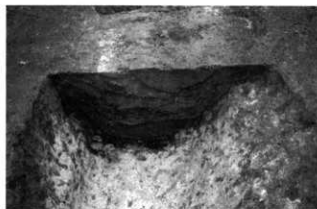
F SK-01 完掘 (西より)



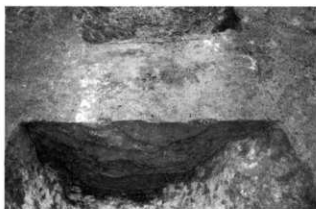
G SK-01 土層 (西より)



H SD-01 北側土層 (南より)



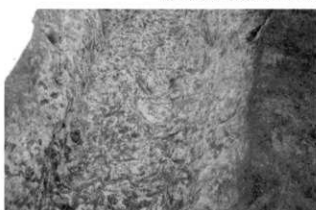
A SD-02土層 (西より)



B SD-02上層の炭化物 (西より)



C SD-02北側土層 (南より)



D SD-0底面工具痕 (西より)



5-1



5-2



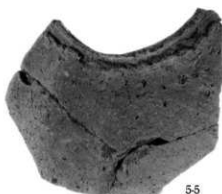
5-3



5-4



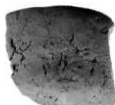
5-4部分



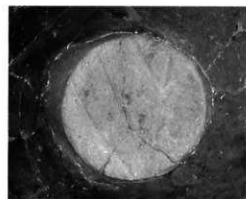
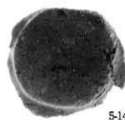
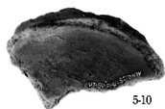
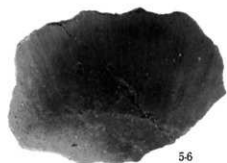
5-5



5-12



5-13

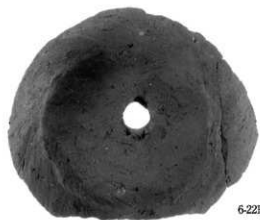




6-21R



5-16R



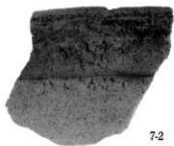
6-22R



6-22



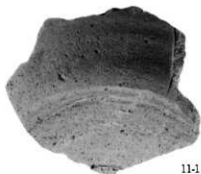
5-15



7-2



12-2



11-1



12-5



12-1

報告書抄録

ふりがな	すなうばぬまいせきえふく							
書名	砂田姥沼遺跡 (F区)							
副書名								
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第83集							
編著者名	近藤 真・木野順敏							
編集機関	株式会社 日本窯業史研究所							
所在地	〒324-0611 栃木県那須郡那珂河川町小砂 3112 TEL 0287-93-0711							
発行機関	宇都宮市教育委員会							
所在地	〒320-8540 栃木県宇都宮市旭 1-1-5 TEL 028-632-2764							
発行年月日	2013年7月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
砂田姥沼遺跡 (F区)	宇都宮市インターパーク 4丁目3-8	9201	4356	36° 29' 39"	139° 54' 48"	2013.3.12～ 2013.3.27	約230㎡	店舗建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
砂田姥沼遺跡	集落跡	・縄文時代 ・古墳時代前期 ・古代 ・時期不明	・一 ・竪穴住居跡 1軒 ・竪立柱建物跡 1棟 ・溝 2条 土坑 1基 小穴 21口		・縄文土器・石器 ・前期～後期の土師器 ・土師器・須恵器	・古墳時代前期の竪穴住居跡を1軒確認した。該期の住居跡は過去の8地区の成果と合せ合計3軒となった。特殊器台が複数出土。		

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第83集

砂田姥沼遺跡 (F区)

発行年月日 平成25年7月31日

編集 株式会社 日本窯業史研究所

〒324-0611 栃木県那須郡那珂河川町小砂 3112

TEL 0287-93-0711

発行 宇都宮市教育委員会文化課

〒320-8540 栃木県宇都宮市旭 1-1-5

TEL 028-632-2764

印刷 下野印刷 株式会社

〒320-0061 栃木県宇都宮市宝木町 1-28-11

TEL 028-622-6953

砂田姥沼遺跡（F区） 正誤表

	誤	正
例言 3.	平成25年 3月12日	平成25年 2月12日
7頁21行目	調査は 3月12日	調査は 2月12日
7頁32行目	3月19日	2月19日
報告書抄録	2013. 3. 12~2013. 3. 27	2013. 2. 12~2013. 2. 27